

教育研究施設のリニューアルに期待する

原正昭

前筑波大学施設部長

現三機工業株式会社常任理事

若い頃から一度は訪れてみたいと思っていたイタリアへ行く機会がやっとできた。3月にはイラク情勢が戦争にまで発展し、さらにSARS(新型コロナウイルス)が各所で心配される状況で、やや消極的であった外国旅行の計画であったが、約37年の勤めに終止符を打った区切りと長い間家庭を支えてくれた妻への感謝もあり、“ルネサンスの旅”と銘打った団体旅行の見出しに、思わず旅行社へ電話したのが4月下旬であった。5月中旬に9日間の予定で実施される、ミラノからローマまでの旅である。特にミラノで「最後の晚餐」、フィレンツェで「ウフィツィ美術館」見学が組み込まれたもので、期待に胸を膨らませて出発したのであった。

私は昭和41年、熊本大学の施設部に採用となり、社会人として期待に胸を膨らませて公務員のスタートを切った。が、私は施設部の業務内容について、十分把握した上での就職ではなかった。

かいつまんで業務の内容をご紹介しますと、大学の校舎や研究棟等の建設や改修を行うための予算要求、実施のための設計・積算、維持管理など(現在は施設のマネージメントも重要な業務となっている)である。ひとつの建物を造るには当然建築の専門家が必要であるが、建築以外にいわゆる建築設備と称される電気設備、通信・情報設備、機械設備等の専門家が必要である。私はその内の機械設備の分野の専門家の卵であった。ところでこの建築設備のうち電気設備や通信・情報設備については、おおよその内容が想像できることと思うが、機械設備について直ぐには具体的な内容が思い浮かばない方が多いと思う。就職当時の私がそうであった。機械設備の具体的な内容は、聞いてしまえばごく普通の、誰でもよく知っている内容であるが、例えば給水、排水の設備、都市ガス設備、冷暖房設備などである。羅列すれば建築物には当た

り前のものばかりで(これ以外に特殊な設備類もあるが)、備わっていて当然のものばかりである。ところで当時はこれらの設備類を建築附帯設備と称して、建築のプランが固まってから部屋の隅などを利用して器具などを配置するものだから、ユーザーや建築プランナーの期待を裏切る形にならざるを得ないところがあった。時代は高度成長期を反映して先進の建物が続々と建設され、当然建築設備も新しいニーズに対応すべく進歩しつつあった。現在では当たり前前の設備であるところの空調設備でも、当時はデパート、ホテルや病院など大規模な建築物に限られていたのである。このような時代の流れの中で大学の建築物についても、当然建築設備に対する期待や要求が高まり、それらに応えるべく、建築基本計画の段階から建築設備の担当者は、建築のプランナー等に同席して、計画に対する意見を述べたり、提案をプレゼントすることが重要になってきたのである。丁度そのような時代背景のころ筑波大学も建設が本格化し、私も筑波大学の病院地区の整備に参加することとなり、昭和50年4月に文部省(当時)へ転勤したのであった。

施設再生への期待

ところで、特にイタリアでは、古くから残る遺跡は兎も角、一世紀以上経過した石

やレンガで造られた多くの建築物が今でも十分に機能し利用されていることに感動を受ける。と同時にそれぞれの時代の要求にマッチしたりリニューアルをどのように実行してきたかに興味をそそられるのである。建築設備を専門とする者の立場から見ると、新たなニーズに対応する設備の増強や更新等をいかにして実施しているのか、ましてや大学などの先端的研究への改造などは、イタリアその他諸外国ではどのように計画されるのか、大いに関心を引かれるのである。

筑波大学も30周年を迎え、年月の積み重ねが構内の樹木などに正直に現れて、学園の風景に重厚さと大らかさが感じられるようになった。同時に各研究棟や実験棟は、それぞれの経過した年数分老化してきた。建築物と建築設備との老化速度の違い、建築設備に対する時代の要求の変化など幾つも重なるファクターに対する最適改修改善サイクルの想定等は、まだまだ手探りで検討している場合が多い。イタリアへの“ルネサンスの旅”を終えて、特に建築物の再生についてのおもいは深まる一方だし興味は尽きない。筑波大学が30年の節目を迎えて、更なる発展のための礎となる教育研究施設の再生等が、順調に展開することを期待する。

はら まさあき